

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03100

研究課題名（和文）近世の歴史編纂と家系図・由緒書・偽文書

研究課題名（英文）History compilation and family tree of early modern Japan

研究代表者

山本 英二（YAMAMOTO, EIJI）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：20262678

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、これまで荒唐無稽で信憑性に欠けるとして研究対象とみなされていなかった偽文書・由緒書・家系図を利用して、近世における歴史編纂の過程を究明した。具体的には、信州松本藩主松平丹波守家（戸田本宗家）の歴史編纂事業を事例に、17世紀から19世紀に至る家系図や歴代藩主事跡録の作成目的・作成過程・作成意義について分析・検討した。特に偽文書や由緒書に比べて研究蓄積の薄い家系図の分析に力点を置いた。また伝統的な古文書学的考察に加えて、アーカイブズ学などの方法論を援用しながら、史料群と史料作成過程において見られる近世を生きた人々の歴史的言説・思考について明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は、従来からの古文書学的な考察に加えて、史料群そのものが有する情報を、アーカイブズ学の方法論を援用して、より具体的に明らかにすることができたことにある。書かれた文字情報の分析だけでなく、家系図や偽文書が作成される動機や背景、作成者の意識にまで踏み込んで分析することに学術的意義がある。こうした研究成果は、現代の日本社会に共有されている歴史意識について、新たな歴史像を提供することで、新たな歴史認識をもたらす社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the historical perceptions of the Edo period. The materials used in this study are fake documents and family trees. The subject of the study is the Toda family of Matsumoto Han (feudal domain) in Shinano Province. Matsumoto Han has produced several biographies and family trees of successive heads of the clan. Among them, the family tree created at the beginning of the 19th century is the most important one for the Toda family. The reason for this is that it was necessary for the Toda family to boast of its traditions and family status. In this study, I conducted historical research throughout Japan and collected a large amount of data on family trees. The greatest advantage of this research is that it allows us to analyze in detail family trees that have rarely been studied before.

研究分野：日本近世史

キーワード：近世 偽文書 由緒書 家系図

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、これまで荒唐無稽で信憑性に欠けるとして、うち捨てられてきた家系図や偽文書、由緒書を活用して、近世日本における歴史常識の形成に関する言説を分析したいと考えている。従来の日本近世史研究では、いわゆる近世文書に偽文書は少なく、中世史研究のように厳密な古文書学的知識や真贋鑑定は必要ないと考えられてきた。なぜなら研究者にとって、中世に仮託された一見して贋作とわかる、取るに足らない偽文書は、その多くが江戸時代に作成されているものであり、そのため偽文書や由緒書は、近世史からも中世史からも無視されがちであった。

このように従来、注目されることのなかった偽文書や由緒書も、その作成時期、作成動機、作成者、時代背景が判明すれば、歴史研究の絶好の素材となる。由緒は、1980年代後半から、日本近世史研究において注目されてきたキーワードである。当初の研究では、役の体系論の観点から、主に村落史研究において、18世紀後半以降の由緒や偽文書を根拠に諸役免除特権を獲得する合法的民衆運動のひとつとして研究が進められた。

やがて1990年代を通じて由緒および偽文書研究は進められ、着実に研究が蓄積されてきた。研究代表者も、甲斐国の武田浪人を対象に、身分上昇運動と苗字帯刀特権の獲得過程を論じ、由緒や偽文書は、19世紀の江戸幕府による歴史・地誌編纂を通じたイデオロギー統制に関連して主張されることを指摘した(山本英二「甲斐国『浪人』の意識と行動」『歴史学研究』613号、1990年)。

しかし19世紀を「由緒の時代」と規定すると、由緒だけでは日本近世史全体を俯瞰することは不可能となる。そこで改めて検討すると、特定の権力、なかでも徳川家康=東照大権現を権威の源泉として獲得される身分特権は、17世紀後半、寛文・延宝期にすでに広く確認されることが明らかとなったのである(山本英二「創り出される由緒」白川部達夫・山本英二編『江戸の人と身分2 村の身分と由緒』吉川弘文館、2010年)。

こうした研究過程で明らかになったのは、これまでの由緒・偽文書研究は、村や将軍・天皇にばかり注目が集まり、大名の家系図や系譜といった政治権力の言説もまた由緒として語られるにもかかわらず、研究から抜け落ちていたことが判明した。しかも17世紀後半に幕藩制国家が確立する過程で由緒が創造され、偽文書が作成されている。つまり近世の社会集団の形成・展開と由緒は軌を一にすると考えられる。つまり今後の偽文書・由緒研究は、さまざまな身分集団が主張する言説に即して分析する必要、とりわけそれぞれの段階の由緒がどのような歴史認識に基づくのか、そしてそれは記憶というかたちでの伝承が、文字化されることで展開する構造を理解しなければならない研究段階に立ち入っているといえるのである。

2. 研究の目的

本研究では、4年間という限られた研究期間を考慮し、以下のような課題を設定したい。

松本藩戸田家では、江戸幕府の編纂した「寛政重修諸家譜」において公家の三条家に結びつ

く先祖の由緒が否定された。また徳川家康を誘拐したという不名誉な俗説を否定するため、古文書探訪を実施し、天保年間に「天保改正戸田系譜」を完成させた。この探訪作業は、のちの近代歴史学につながる要素を有する。そこで上記の編纂過程について、具体的に以下の手順で研究を進める。

1) 近世大名における家系図と由緒書、偽文書に焦点を絞り研究をおこなう。これは真正の文書にしか着目してこなかった研究状況を克服するためである。

2) 近世の武家社会では基本かつ典型となる大名の家系譜類を素材に、偽文書と由緒の創出を具体的に解明したい。これは村と将軍・天皇に偏りがちであった由緒・偽文書の研究状況にたいする反省からである。

3) 具体的には、信濃国松本藩戸田家(松平丹波守家)の古文書の悉皆調査と現状記録調査により、家系図の作成過程とその時期、由緒の創造と変容を追求する。偽文書は、真正の文書では欠けている部分をねつ造するのであり、偽文書作成時期と動機を知るには、文書群の全体構造を把握することが必要不可欠な作業となるからである。

3. 研究の方法

本研究では、信濃国松本藩戸田家文書群について、悉皆調査 現状記録 目録編成 解読・分析 比較・検討 成果公表の手順で作業を進めた。

まず悉皆調査の実施である。調査対象とする信州松本藩戸田家は、信濃国筑摩郡・安曇郡を支配する6万石の譜代大名で、官位は従5位下丹波守、江戸城の殿席は帝鑑間詰、一族外で最初に松平の苗字を授与された家柄である。戸田家に関する古文書は現在、徳川林政史研究所・松本城管理事務所・松本市立博物館・信州大学などに分散して保管されている。調査にあたっては、信州大学人文学部日本史研究室を拠点に、各史料保存機関において実施する。

作業にあたっては、戸田家古文書群の現状記録と目録編成作業を進めた。具体的には所蔵環境および収納容器単位毎の現状をスケッチし、しかるのちに古文書1点毎にスリットを挿入、もしくは中性紙製の専用整理封筒に格納する。そして中性紙製保存箱に保管する。そして古文書目録データを、ノートパソコンに、史料ナンバー・史料タイトル・内容表題・形態(縦冊・横帳・綴・状・絵図・その他)・差出人 受取人・数量・備考(保存状態・特記事項)を詳細に入力・編成する。編成した目録データは、電子情報化し、データベースを構築する。また必要な古文書は、設備備品費により購入するデジタルカメラで撮影、およびスキャナで読み取り、携帯型HDDもしくは記録メディアに保存し、またレーザープリンタなどで出力して印刷し、研究に活用する。

具体的な作業工程は、以下のように実施する。

まず、徳川林政史研究所所蔵の古文書調査を優先的に実施する。調査は、限られた時間を考慮して、古文書目録の確認を最優先し、ついで内容分析・検討、の順序で調査を進めたいと考えている。また戸田家系図の編纂過程の調査作業を進める。

ついで徳川林政史研究所において調査を継続実施するとともに、従来未調査のままであった松本城管理事務所・松本市立図書館の本格的調査に着手する。松本城管理事務所には、家臣団の系譜集「諸士出身記」が、松本市立博物館には戸田家の領知朱印状などイエ文書があり、松本藩および戸田家に関する情報が含まれており、具体的な偽文書や由緒に関する成果が期待できる。

そのほか東京大学史料編纂所および国立公文書館内閣文庫において、松本藩戸田家ならびに江戸幕府の系譜編纂事業に関する調査を実施する。松本藩における系譜編纂事業について、江戸幕府および幕藩制国家の立場からどのように位置づけることができるかを調査・検討し、個別事例の分析から一般的な歴史法則の究明へとつなげていく。

そして最終的には補充調査をおこない、4年間（延長して6年間）の成果をとりまとめ、その成果を学術論文および学術図書として随時公表する。

4．研究成果

2017～2022年の6年間の研究助成期間における主要な研究成果としては、学術論文・学術図書9件、学会発表など5件を公表することができた。

本研究では、信濃国松本藩主戸田家（松平丹波守家）について悉皆調査を実施し、主に家系図や歴代藩主事跡録を中心に分析・検討をおこなうことができた。主な史料調査先は、東京都豊島区・徳川林政史研究所、長野県松本市・松本城管理事務所、長野県松本市・信州大学附属図書館である。また関係史料の調査先として、東京大学史料編纂所、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館、静岡文化芸術大学、長野県立歴史館、浜松市立中央図書館郷土資料室などの公的史料保存機関において調査を実施した。その他にも比較・参照用の史料調査を、主に静岡県浜松市龍秀院、静岡県浜松市洞雲寺、新潟県小千谷市魚沼神社などにおいて実施した。現地調査にあたっては、悉皆調査による古文書類の保管状況の確認、収納容器単位毎の現状記録・取り上げ作業、古文書1点毎の付箋挿入や中性紙製封筒への収納、および中性紙製史料保存箱への格納といった作業をおこない、閲覧と保存の便宜を図った。

こうして今回の調査により、近世における松平丹波守家における家系図編纂事業の全貌が明らかとなり、その歴史的な意義が判明した。ただし当初の計画は2017～2020年の4年間で想定していたが、2020年1月以降の新型コロナウイルスの感染拡大に伴う行動制限もあって、現地におけるフィールドワークや史料保存機関での史料閲覧が著しく制限を受けた。そのためやむを得ず2021～2022年まで2年間の研究期間の延長を余儀なくされた。行動制限期間においては、当初の研究計画を変更して、それまでに収集した史料データの分析作業に充てることとなり、史料の解読については飛躍的に進捗させることができた。

調査の結果、徳川林政史研究所が保管する「信州松本城主戸田家文書」は、もともと藩主である戸田家（松平丹波守家）が所蔵していた藩主お手元文書であること、さらに松本市立博物館や松本城管理事務所が保管している戸田家文書群と一体のものであったが、後年分割され、一部が

古書店に流出した後、徳川林政史研究所が購入・所蔵するに至ったという経緯が判明した。そして林政史研究所所蔵の戸田家文書の主要部分は、家系図編纂に係わって作成されていることもわかった。また徳川林政史研究所には、歴代藩主の事跡録である「御事実綱領」も所蔵されている。

近世において作成された戸田家に係わる家系図には、江戸幕府編纂の「寛永諸家系図伝」、「貞享書上」、「寛政重修諸家譜」があり、また新井白石「藩翰譜」、松本藩による「本氏戸田系譜稿本」、「天保校正戸田系譜」、明治政府に提出された東京大学史料編纂所所蔵「戸田家譜」などがある。これらの系譜類のなかで重要なのが「寛政重修諸家譜」と「天保校正戸田系譜」である。は江戸幕府によって編纂された公的系譜であるが、系譜の冒頭部分で戸田家の先祖を公家の正親町三条家に結びつける部分に疑義が呈されており、当該時期における幕府の考証水準を示すと同時に、松平丹波守家にとって深刻な危機意識をもたらした。松平丹波守家では、寛政重修諸家譜の見解に対する異議申し立てをする目的で、藩に置かれた譜局を中心に、藩独自に系譜編纂・改正事業を開始する。こうした過程で収集された様々な史料が徳川林政史研究所の戸田家文書群である。

松本藩では、三河国や高野山などで古文書調査を実施するなど、1次史料に基づいて正確な系譜編纂を試みている。編纂にあたって特に重視されたことは、一般に流布している戸田家の先祖が東照大権現＝徳川家康を金銭目的で誘拐したという不名誉な事実の否定、松平一族以外で戦国期から松平の苗字を与えられた経緯と三つ葉葵の紋章の使用例、刊本として流通している「武鑑」に記載されている戸田系図の修正、正親町三条家に結びつく藤原氏系図から清和源氏系図への書き換えの現実性などである。こうした調査の成果をふまえて、寛政年間以降の家系を含めて作成された系図が「本氏戸田系譜稿本」であり「天保校正戸田系譜」である。「天保校正戸田系譜」は、江戸幕府に提出されることはなかったが、明治新政府による系譜提出命令に際して提出されており、戸田家の当初の目的は明治初年に達成されたといえる。

このほかにも、科学研究費補助金を利用して、数多くの偽文書や由緒書、家系図に関する史料を発掘し、それらを分析・検討することを通じて、学会報告および招待講演をおこない、学術論文や学術著書の執筆などにより、その成果を公表することができた。特にこれまで研究蓄積が希薄だった家系図研究を組み込むことにより、より豊かな近世史像の構築に寄与できたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山本英二	4. 巻 なし
2. 論文標題 全国史料ネット総覧 中部 信州史料ネット	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック』	6. 最初と最後の頁 pp.179-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 46号
2. 論文標題 新刊紹介 揖斐高編訳『江戸漢詩選』上・下	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『信大史学』	6. 最初と最後の頁 pp.55-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 230号
2. 論文標題 書評 温泉研究は歴史学たり得るのか 高柳友彦著『温泉の経済史』に寄せて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人民の歴史学』	6. 最初と最後の頁 pp.39-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 なし
2. 論文標題 信州資料ネットの設立と活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群馬歴史資料継承ネットワーク編『群馬の歴史資料を未来へ』	6. 最初と最後の頁 pp.87-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 46
2. 論文標題 幕末期尾張藩の年中行事と忌日	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 徳川林政研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.105-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 862
2. 論文標題 書評馬部隆弘著『由緒・偽文書と地域社会 北河内を中心に』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 pp.89-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻
2. 論文標題 イエの由緒	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 水林彪他編『法と国制の比較史』	6. 最初と最後の頁 pp.457-482
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻
2. 論文標題 『慶安御触書』は実在しない	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝春秋編『日本史の新常識』	6. 最初と最後の頁 pp.177-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本英二	4. 巻 263号
2. 論文標題 「近世における『偽系図』について」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『歴史と地理 日本史の研究』	6. 最初と最後の頁 pp.27 - 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本英二
2. 発表標題 2019 年台風 19 号豪雨災害と信州資料ネット
3. 学会等名 日本学術会議・日本歴史学協会主催シンポジウム 「続発する大災害から史料を守る 現状と課題」 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本英二
2. 発表標題 甲斐国における偽文書と贋作者の正体
3. 学会等名 近世の宗教と社会研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本英二
2. 発表標題 信州大学の古文書 多湖文庫と松本女子師範「郷土資料」
3. 学会等名 信州大学附属図書館中央図書館・知の森昼どきセミナー
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本英二
2. 発表標題 歴史教科書で考える江戸時代の被差別民
3. 学会等名 第41回長野県下高井郡山ノ内町人権・同和教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本英二
2. 発表標題 寛文年間の窪八幡神社
3. 学会等名 甲州史料調査会調査報告シンポジウム「古文書から見る窪八幡神社」
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>幕末期尾張藩の年中行事と忌日 http://www.tokugawa.or.jp/institute/pdf_file/kiyou53-yamamoto.pdf</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------